

# 国際名称科学会議の先住民族部会と アイヌ語地名の痕跡研究

鏡 味 明 克

## 1 はじめに

本稿は、2008年8月カナダ・ヨーク大学において開催された国際名称科学会議について、参加し研究発表を行った「先住民部会」の開催の意義と評価を述べながら、自身がその1編として、どのような研究発表を行ったかを報告するものである。3年ごとに開催されるこの国際学会の最近の開催については、本誌35号掲載の「商業地名の分布と変化」の中で2005年開催のイタリア・ピサ大学開催について、報告をまとめている。

この地名人名等の「名前」の研究の唯一の世界規模の国際学会については、これまでにたびたび紹介をしてきたので、今回は簡潔にその特色と最近の変化についての紹介にとどめたい。

この1938年に創設され、今回で第23回を数える国際学会は、International Congress of Onomastic Sciences (略称 ICOS) と称し、選出された International Council of Onomastic Sciences が運営にあたり、学会の開催と機関誌 *Onoma* の編集を行ってきた。十数年前までは、International Committee of Onomastic Sciences という委員会が運営にあたり、委員は本部からの任命制であった。これは機関誌 *Onoma* の主たる目的が世界の研究文献目録の収録にあったからである。筆者もその日本担当委員に指名され、長年日本の研究文献の紹介報告を行ってきた。しかし近年機構改革が行われ、任命制の廃止、購読自由参加制に移行し、購読している正会員による総会で、運営委員を選出するようになった。また *Onoma* もインターネットで文献検索が容易になった時代の変化に対応して、文献目録をやめ、テーマを決めた年報の特集号とし

て原稿募集し、編集刊行するようになった。2007年版 (Vol. 42 未刊) は「都市の地名」特集号で、筆者も依頼原稿の指名を受け、日本の都市内部の商店街名の現況についての論文を執筆した。2008年 (Vol. 43) はコマーシャルのネーミング特集、2009年 (Vol. 44) はアフリカ特集とすでにテーマが設定され編集が行われており、続いて2010年 (Vol. 45) 歴史研究関係、2011年 (Vol. 46) 少数民族関係と提案が出ているのが今後の見通しである。

さて、3年ごとの研究発表会は先般2005年にイタリア・ピサ大学で開催され、今回の第23回大会は、カナダ・トロント大学で2008年8月17-22日の会期で開催されたが、研究発表は会員以外でも自由、「名前」に関するすべての研究が受理されるが、毎回主たる特集テーマは設定され、前もって公示される。ピサ大会では「時間と空間における名称」と設定されたが、今回は、Names in Contact: Names in a Multi-Lingual, Multi-Cultural, Multi-Ethnic World (接触における名称：多様な言語・文化・民族の中の名称) と設定された。そして、発表会場を区分する Session (分科会) が、通常は、名称理論、地名、人名、文学 (における創作) 名称、ビジネスネーム (企業名、商標などの) などなどと区分されるのに対して、今回新たに設定した3つの分科会のひとつに、Aboriginal, Indigenous, First Nations Naming (先住民の、土着の、最初の民族のネーミング) という表題が示された。これは、今回の大会の特集テーマ、Names in Contact に合わせた中心をなす分科会の設定と注目した。もちろん開催国カナダは英語・フランス語の2公用語国であり、アメリカ・

インディアンの諸部族や北方地域のイヌイット族の言語など、顕著な多言語地域であることから、その多くの研究の発表参加や世界各地からの多言語研究の吸収という双方を期待した設定と理解した。筆者にとっても、長年アイヌ語の日本語接触変化を研究してきた立場から、この部会の発表を吸収することと、自身もこれに参加し、発表することとをありがたい機会と考えた。ゆえに、この部会での発表を申込み、要旨が受理されて、分科会の日程に登録された。

本稿は、前半に今回の国際学会をこの「先住民のネーミング」部会についての、筆者の発表を含めた概括、感想を中心として、開催行事全体の紹介報告をまとめ、後半に筆者の発表の、これまでの筆者の研究に新しく付け加え提示した内容を記載することにする。

## 2 先住民のネーミング部会

今回の第23回国際名称科学会議は2008年8月17日から22日まで、カナダ、トロントのオンタリオ州立ヨーク大学で開催された。今回の開催は、本学会の副会長であり、ヨーク大学のVPA (Vice President of Academy)、すなわち、学術担当の副学長を勤める、Sheila Embleton 女史の尽力で、その副学長の予算を活用して実現したものである。ヨーク大学は学生数5万（カナダで3番目の規模）、1キャンパスとしては最大規模といい、トロントの都心部からはるかに離れているので、参加者の宿泊用に学寮等が提供された。寮の建物も構内に15もあり、その一つと、会場に使われ

た校舎とが宿泊用に提供された。写真は新しい建物の建ち並ぶ構内、右の全面ガラスの建物が筆者が宿泊した9階建ての学寮、Pond Road Residenceである。

1827年創立と歴史の古い理科系が有名な同じく州立のトロント大学に対して、ヨーク大学は1959年創立であるが、主として文科系の充実した、9学部を擁するライバル校であり、カナダの代表的な大学のひとつである。

開催の日程は、17日は受付登録、18日開会式と講演、研究発表。この日から20日の1日エクスカーションを除き、毎日、基調講演と分科会に分かれた研究発表が行われた。分科会は、今回はかなり細分され、ビジネス、ユダヤ系の名前、先住民族、人名a、人名b、地名a、地名b、地名c、カナダの地名、文学の地名人名、社会現象としての名称、街路名、アルプスと山岳、地図地名、名称教育、文献目録、標識の言語、その他の名称の18に細分され、発表の教室が配当された。20日は1日ツアーで、貸切バス3台（うち1台は大学のバス）で、ナイアガラへ片道約2時間、午前中は葡萄の栽培が盛んなナイアガラ地域のワイナリー2か所を訪ね、午後は、ナイアガラを展望塔の上からと、観覧船Maid of the Mist号で至近距離からの眺めとを楽しんだ。朝9時半に出発し午後8時に大学に戻った。

21日は、午前中は研究発表で、筆者も発表した。午後はICOSの総会で、正会員のみが会議場に入り、この3年間の会長、各委員の会務報告に続いて、向こう3年間の会長、副会長、会計、庶務、運営委員の選挙を行い、今回の開催の代表を勤めたエンブルトン現副会長を新会長に選出した。そして、次回の開催地は総会までに執行部でとりまとめられていて、この場で正式に紹介されるのが慣例であるが、今回は開催地を投票で決するというこれまでにない異例のことがあった。前回のピサ大会では、次回のヨーク大学開催の紹介のほか、その次の2011年の開催地の候補として、スペインのバレンシア大学が準備を進めていることの紹介があった。しかし今回の総会では、バレンシア大学に代わってバルセロナ大学がバレンシ



ア大学の協力の下開催するという案に対し、イギリスのグラスゴー大学が立候補し、ともに紹介と宣伝のビデオを持参して開催希望を表明した。投票の結果、バルセロナ大学案が賛成多数で決定となったのであるが、バルセロナ大学の方がすでに3年先のスケジュールを9月4日から10日と設定し、会場やツアーの準備なども具体的に紹介するなど、準備の良さが理解されたようである。総会のあと、閉会式、宴会（Banquet）となるのがいつもの例であるが、今回は祝宴の翌日22日も朝から残りの研究発表の部会、南アフリカの地名に関する講演などあって、その日の夕刻に閉会式が行われ、選挙結果や次回のバルセロナ大学開催などが全員に披露されて、すべての日程を終了した。今回の参加者は名簿によると研究発表が182名、登録参加者193名（同伴者はこの人数に含まれていない）で、参加者の大半が発表をしたことになる。日本からは、ほかに参加予定者2名があったが、結局筆者一人の参加となった。ヨーロッパ各地での開催が続ぎ、北米での開催は1987年のケベック・ラヴァル大学開催以来21年ぶりであった。その関係か、ヨーロッパ各地の開催でよく一緒になった知友の参加がやや少なかった寂しさがあった。一方、カナダ、USAのほか、オーストラリア、ニュージーランド、南アフリカ、旧ソ連の中央アジア諸国など、ヨーロッパ以外からの参加がかなりあり、地球規模の学会としてはより広がりを感じられた面もあった。

さて、本題の「先住民族部会」について、いよいよ述べることにしよう。この部会の基調講演としては、冒頭18日の、オタワ大学の André Rapiere 教授（エンブルトンさんとともに任命制時代のカナダの代表委員）による、A mari usque ad mare: Reflection on the Toponymy of Canada（海から海まで：そのカナダの地名への影響）であった。主題のラテン語の「海から海まで」とは、「大西洋から太平洋まで」という大陸開拓時代の、歴史的に有名な標語である。インディアンやイヌイットの先住民族地名の上に、開拓者のフランス語や英語が混合したり重複したりしていった歴史の概説をパワーポイントによる地図の掲示で興味深く解説

した。とくに北極圏地域のイヌイット地名の分布図の掲示は興味深かった。従来の資料で地名が希薄な場合は、命名が希薄なのではなくて、先住民族の命名していたものの調査が希薄であった部分が大きいうという指摘は大変興味深かった。

「先住民族部会」の発表は全部で10編、一つは筆者の発表、一つだけ聞けなかった発表があり、他の8編は全部聴いた。この8編（すべて英語。この学会で使用できる言語は英仏独語である）の表題（英語題名略）と内容の要点は次の通りである。（発表順）

Shannon Thunderbird（カナダ）「時代の知恵、家から妖怪まで。Coast Tsimshian の先住民の命名の実際」部会の最初の発表。発表者はブリティッシュ・コロンビア州北部のインディアン出身の研究家で、民俗学者、作家、インディアンの民謡を歌う歌手でもあり、バンキエットでは、その家族で結成している歌舞団とともに歌唱を披露した。この研究発表もインディアンの衣装で登場し、いかに自然を基盤に命名が行われているかを解説し、その命名と関連する呪術儀礼の実際を披露した。先住民族部会の冒頭にふさわしい発表であった。

Phillip W. Matthews（ニュージーランド）「ニュージーランドにおけるマオリ族選手の人名の変化の型」19世紀末以来のマオリ族出身のラグビーとクリケットの選手310名の名前の分析。英語名との重複や混淆が目される。

E. Lawson（USA）、Zineida Zavyalova（ロシア）「西シベリアのタタール族へのロシア語の影響に伴う文化的・言語的影響」Zavyalova（トムスク教育大学）の研究をLawson（ニューヨーク州立大学 Fredonia 校名誉教授）が解説し、Zavyalova が補足し質問に答える形で、共同発表が行われた。人名の調査で、都市部と農村部との相違を統計により明らかにしている。

Renee Pualani Louis（USA）「ハワイの地名の重層。旧名の喪失と再命名」この発表のみ、時間の都合で聴くことができなかった。

Joshua Nash（オーストラリア）「一つの領土、多くの地図。Norfolk Island の地名と命名の様相」

島の自然地名について、先住民族語と英語との重複に注目した。ピジョンやクレオール語の考察も必要とされる。この発表は19日で、21日の筆者の発表の司会者も担当した。

Ian D. Clark (オーストラリア)「オーストラリア・ヴィクトリア州西部の多様な先住民地名」アボリジニ地名の多様性、特に英語との接触による命名の重複に注目した。1地名2名称のケースも少なくないという。

Kaisa Rautio Helander (ノルウェー)「名称接触理論から見た先住民族の地名の公式再命名」先住民族サーミの居住するノルウェー北部フィンマルク地方の地名の公式地名化の過程で、ノルウェー語への翻訳やスペルや文法の変化を文書の時代を追って考察した。

Michael James Walsh (オーストラリア)「オーストラリアのアボリジニの地名における政治問題」アボリジニの伝統的な土地所有を認知するための地名調査が行われてきたが、その名称の認知に様々な困難があったことを概括し、英語との重複名、誤用された疑似アボリジニ地名などがあることを指摘した。

Akikatsu Kagami (日本)「日本語との接触によるアイヌ語地名の変化と痕跡」東北地方のアイヌ語地名の日本語との接触変化の結果、最近までアイヌ語からの変化とみなされなかった痕跡地名の復元例を分布図による痕跡の判定を加えて解説した。使用したハンドアウトの詳細は、以下の第3章で述べるが、その要旨の読み上げに先立って、アイヌ語の基本的な紹介として、東北地方にかつて広くアイヌ人の居住があり、東北地方で日本人との度重なる戦争と衰亡の歴史があること、北海道のアイヌ人の現況などの説明をしたことは理解を助けたと思われる。各自の持ち時間は30分、20分発表10分質問の時間厳守で進行。最初の5分をこの紹介に充て、15分の本論を論述した。細分された分科会で聴衆は10名ほどに限られたが、いくつかの熱心な質問もあった。

Aud-Kirsti Pedersen (ノルウェー)「言語の変換状況における地名のアイデンティティ」この発表もノルウェー北部のサーミの地名の研究で、サー

ミ地名がノルウェー語化する型を、音変化、翻訳変化、その複合変化に3分して考察した。サーミ語は話せないがサーミの地名は理解語彙として伝承していて、しかし今はサーミ系でないより新しい地名を使うことが多いという調査結果も興味深かった。

以上が「先住民族部会」の発表である。もうひとつ南アフリカのP. E. Raper「Khoisan族の名前の語源」は欠席キャンセルとなった。

以上、地域別では、カナダ・インディアンの研究1のほか、オーストラリアのアボリジニの研究3が最も多く、次いでノルウェーのサーミの研究2、ニュージーランドのマオリ、USAのハワイ、ロシアのタタール、日本のアイヌの研究各1ということになる。地元のカナダの研究は冒頭のサンダーバードさんに代表された観があるが、一方「カナダの地名」の部会が設定されたので、そちらに入っているかを見ると、そうではなく先住民族言語を問題にした発表はすべてその部会に入れられたようである。

各研究を通しては、種々の条件で複合した新旧言語のdual nameの指摘がほとんどの研究報告で共通したことがあげられよう。それは筆者のアイヌ語研究でも同様である。

その他の部会についても興味深い発表が各種あった。会期中にすべての基調講演と、研究発表計23編を聴くことができた。内容別では主として地名の部会に出席した。また語学力の制約があるので、原則として英語の発表のみを聴いているが、Street Namesの部会は特に関心があるので、ドイツ語によるハンガリーの事例の発表も聴いたし、ヘルシンキの街路名のバイリンガルの処理問題を市の都市計画課のパンフレットをもとに説明した発表(英語)なども興味深く聴いた。

### 3 東北地方におけるアイヌ語地名の痕跡の復元と地名の分布解釈

発表の表題は、前章に示した通りである。北海道に例が多く、アイヌ語地名の基本をなすアイヌ語根で、東北地方にその分布が確認されていないアイヌ語地名はどう消滅したのか、の発想で、そ



の日本語化による消滅、変形、痕跡を研究してきた、これまでの筆者の復元研究の結果を、分布図による読図を加えて考察した。そのため、配布資料は要旨と地図集の2冊に分けて配布した。

まず、痕跡の考察に先立って、アイヌ語地名の日本語化の基本的、典型的な事例を、pi-nay（小石川）を例として、どのように漢字があてられて、読み換えが起こるか、という日本語化のプロセスを、分布図にその変化過程を段階表示することをあわせて解説した。北海道と東北地方に共通して「比内」の代表的な用字例があり、それが、東北地方で「檜」の字を「ひ」の当て字として用い、「檜」（ひ）を「ひのき」と読み替えることによって、「ひのきない」の地名が生ずる（鏡味1991）。さらに「川」を意味するナイを「沢」「川」などに翻訳すれば、「ひさわ」「ひのきざわ」「ひのきがわ」等の地名になる。この変化段階を符号化した分布図は、『人間文化』22号（2007）の「東北地方のアイヌ語地名の痕跡」で作成したが、その図を増補し、かつ段階をはっきり読み取れる図に改めたのが、ここにも掲げる図1である。図では、「比内」を基本形として黒丸印、「檜」（ひ）の当て字は変化段階1として1の数字で表示、「檜」（ひのき）の読み換えは段階2、「檜木」の漢字の書き換え変化は段階3と表示した。その他の「飛」「火」等の当て字は白丸印とした。「内」が「川」「沢」等に翻訳された変化は（ ）に入れた。英語による研究発表では、これらの説明を、漢字の読み換えの問題が介在するので、語形の表音表記と漢字表記と意味の注記とを併用しながら解説した。

分布図を見ると、まず「比内」という基本当て字は北海道から東北地方の北部に連続し、その変化形が東北地方全域にわたって存在することがわかる。なお、今回この分布を考える上で、確かに「檜」の字は当て字で、その東北地方の地名がヒノキの植生を表すのではないことを、ヒノキの植生限界の分布図（『樹木アートブックⅠ』1990の「日本クライメートゾーン」から引用）から確かめた。図1に新潟県南部から東北地方と北関東の接点付近へと引いた線がそのヒノキの植生北限で

ある。すなわち東北地方にはヒノキの植生は原則として存在しない。すなわち「檜」の字を使うのは当て字だということになる。もっとも紛らわしい例もないでもない。北海道の道南にも「桧山」（ひやま）という郡名がある。ただし、この郡名を定めた松浦武四郎の「郡名之儀ニ付奉申上候條」（明治2年）によれば、この地に松前藩の檜山があつて、檜材を伐採していたという。山田秀三『北海道の地名』（1984）は、それは北海道ではヒバ（アスナロ）を「檜」といったのだろう、という。東北地方でも、そのような「檜」の近似の木をヒノキという紛れはあったかもしれないが、これだけ分布のある「檜」の地名がすべて類似の木に転用されて呼ばれていたとは考えにくい。

なお、この分布図に関して、研究発表の会場でも、なぜ東北地方の南部北関東にかかる地域にも、ヒナイの早い段階の変化形が出ているのか、という質問が出た。これに対する答えとして、この分布は東北地方全域に存在した分布であり、東北地方の中央部、仙台付近などでは痕跡が早く失われ、南部でも福島県などの特に山間部に古型の残存が見られる、いわゆる周囲残存分布と考えられる、と回答した。

次に図2、図3、図4は、『人間文化』に最近連続執筆で考察を進めてきた、北海道においては例の多い、アイヌ語の基本地名型で、東北地方にほとんど確認されていないものについて、東北地方で日本語化によって痕跡がわからなくなっているものにとらえ、その再確認と復元を試みてきた地名型のうち、コタン（集落）（図2）、ペンケ（上）・パンケ（下）（図3）、ヌプリ（山）（図4）について新たに分布図を提示して論述した。『人間文化』では、コタンは18号（2003）で、ペンケ・パンケについては21号（2006）で、ヌプリについては23号（2008）で論証した。コタンは図2のように、小谷（こたに）と古館（こたて）の地名の中に一部埋没しているのではないかと見る。青森県の「小谷」は河川名なら東北地方では「谷」は「ヤ」で「こや」のはずだから、この分布域だけコタンであるのは要注意と見る。「館」

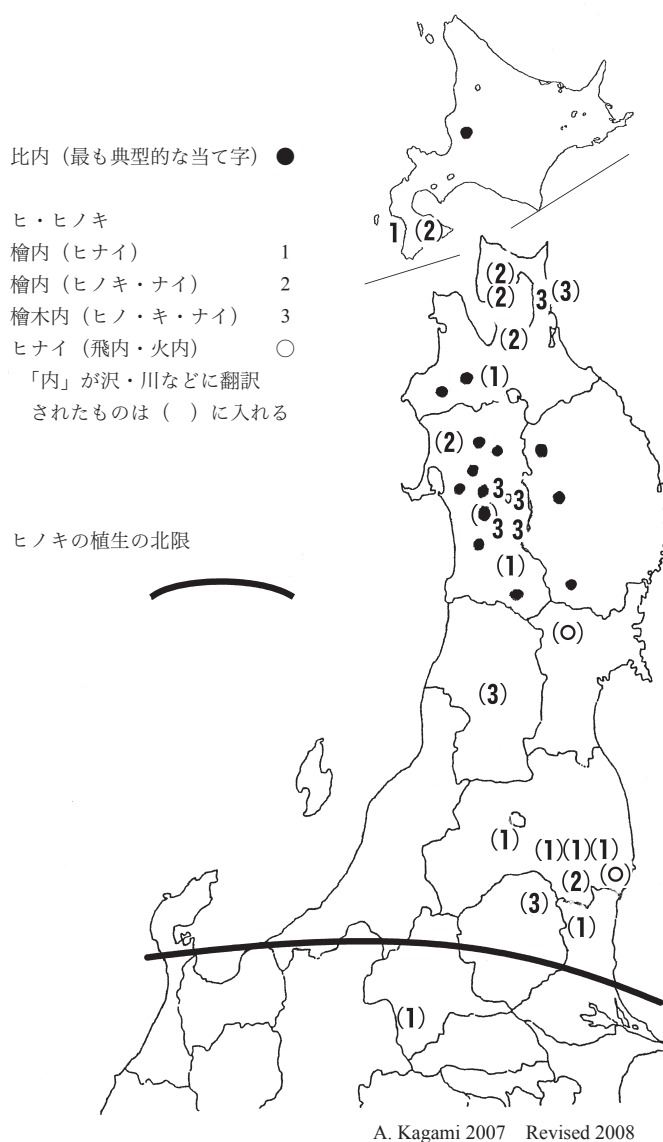


図1 日本語化したビナイ (小石川)

地名も、主としては文字通り「建物」の意のタテ・ダテであろうが、コタテの語形での類音牽引でコタン起源の語が一部「古館・小館・小楯」などの表記を得たのではないかと見る。そこからコタン起源でも読み換えて「ふるだて」などとなったものもありうる。コタンについては、鏡味(2003)の分布図の符号を改め、確認地名を増補して改訂図を掲げた。小谷(こたに)の表記は北海道から新潟県まで連続があり、また図に含めた

が道南には、松前(福山)の城下町の町名に古館町(ふるたてまち)があり、旧称は小館町(こたてまち)だったという。この例も黒丸印から白丸印へと→付きで表示する。

図3のペンケ(上)・パンケ(下)。この対の接頭語は北海道では例も多くあり、ペンクトー(上池)とパンクトー(下池)など、対地名としてもよく使用されている。しかし、東北地方ではその遺称と思われる地名がほとんど見出されない。ま

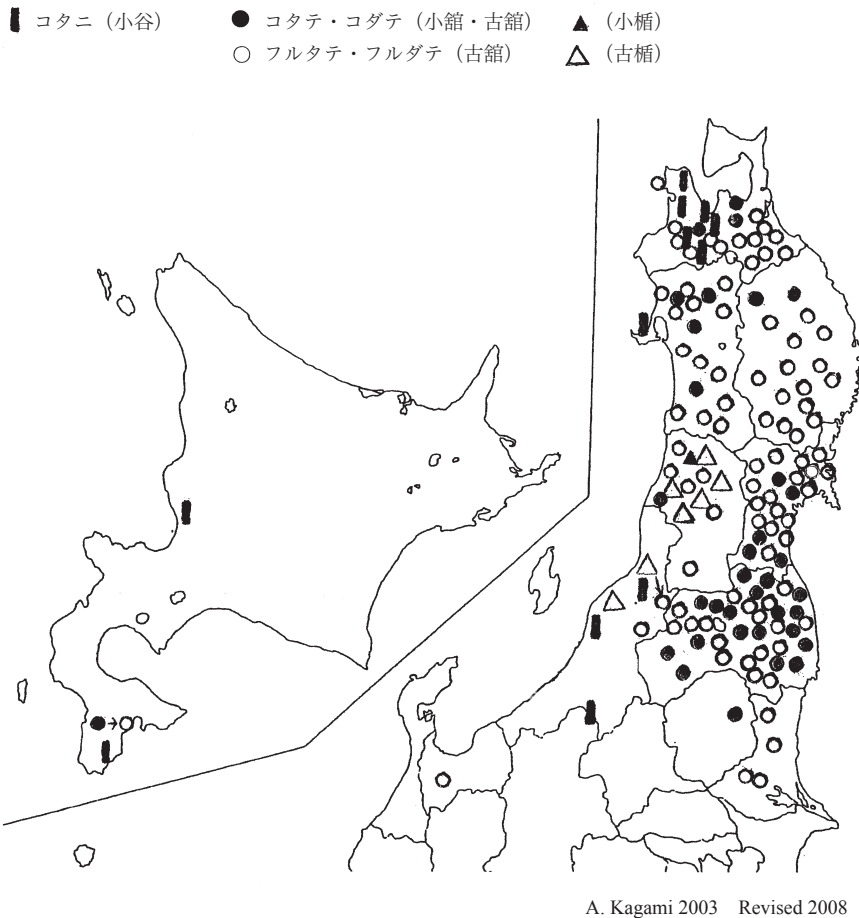


図2 日本語化したコタン（集落）

れに福島県の会津坂下（ばんげ）のような地名が、漢字の文字通り「坂下」であると同時に、「下」（ばんけ）でもありそうである。このバンゲは同じ福島県に西白河郡表郷村大字小松の小字名坂下（ばんげ）の名がある。ペンケの継承の可能性のある「弁慶」（べんけ・べんけい）が図のようにやや連続分布を示唆するが、可能性のほどはわからない。北海道のようなペンケ・パンケの対地名が見出だされないからである。思うに、日本語化の過程で、アイヌ語のペンケ・パンケという類似音の対地名の区別が紛らわしく、日本語化の中で対地名として生き残れなかったのではあるまいか。その結果、日本語のカミ・シモのような対地名が優位でありつづけたのであろう。

なお、わずかに1例、対地名の名残かと思われる例がある。それは2万5千分1地形図「小湊」を引用する、青森県東津軽郡平内町白砂の「弁慶内」（べんけない）である。「内」がつくように、河川名起源であろう。地形図上では弁慶内の地名の記載がないが、『青森県道路地図』（昭文社）にてらして、弁慶内の位置は地形図上に→を加えた河口部であるから、その川も弁慶内という川だったのだろう。さらに地形図上を読図すると、この川は上流が二股になっていて、それぞれ高低差のある二つの池から発している。ゆえに、ペンクトーとパンクトーから発するペンケナイとパンケナイが河川名としてあって、ペンケナイが本流ということかもしれないと推察される。秋田県由利本

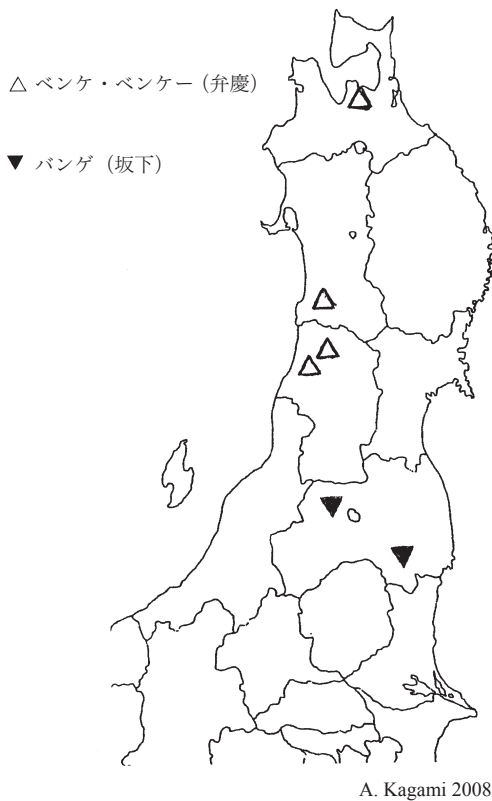


図3 日本語化したペンケ (上) パンケ (下)



荘市の例も河川名の弁慶川である。

山名のヌプリも北海道に、ニセコアンヌプリ、アトヌプリなど数多くみられるのに、山名接尾語として、東北地方に全く見出すことができない。日本語の山名接尾語に完全に埋没したとすれば、それはなぜかを考察する必要がある。一つ考

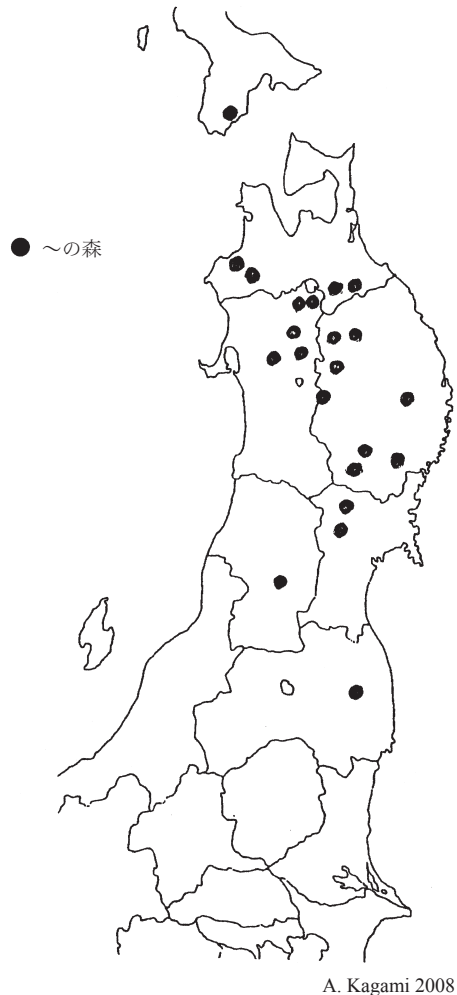


図4 日本語化した～ヌプリ (山名接尾語)

えられる可能性は、『人間文化』23号の鏡味(2008)でも述べたように、東北地方に多い「～森」を接尾語とする山名の濃い分布の中で「～の森」という助詞「の」をつけた山名が集中的にこの地域に多いことは見のがせない特徴である。この類音の型の中かなりヌプリ起源の山名が埋没していないかとの可能性を考えた。分布図の作成にあたり『人間文化』23号の例をかなり増補した。北海道にも道南には松前町の「二の森」の山名があって、連続性がうかがえる。

このような痕跡の発見と復元は今後も課題としていきたい。



なお、ICOS の研究発表での配布地図は、Fig. 1 として日本列島における北海道と東北 6 県の位置図を示したが、その図はここでは再掲しない。この関係で、Fig. 2 がピナイの図、Fig. 3 がコタン、Fig. 4 がペンケ・パンケ、Fig. 5 がヌプリの図になっていた。

#### 引用文献（掲出順）

鏡味明克（1991）「東北地方におけるアイヌ語起源の地名の日本語化」『語源探求』第 3 集 明治書院  
鏡味明克（2007）「東北地方のアイヌ語地名の痕跡」

『人間文化』22 号

林弥栄ほか（1990）『樹木アートブック I』（日本クラ イメートゾーン）アブック社

松浦武四郎（1869）「郡名之儀ニ付奉申上候條」

山田秀三（1984）『北海道の地名』北海道新聞社

鏡味明克（2003）「アイヌ語地名の日本語接触変化」『人間文化』18 号

鏡味明克（2006）「アイヌ語地名の痕跡化」『人間文化』21 号

鏡味明克（2008）「東北地方のアイヌ語地名の痕跡」『人間文化』23 号